



海援隊旗(二隻きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

前人 ZENJIN MITO 未到

リニューアル開始、龍馬の新しい発信の年に

リニューアルに向けて 建物も気持ちも一新 国内外、不安定な気運のまま2015年がスタート。波乱含みと言っても過言ではないだろう。足元が妙におぼつかないのである。坂本龍馬記念館への入館者の皆さんが残していられるコメントにもそれがよく表れている。平成の龍馬、を待ち望む声が確実に高くなった。満を持したかのごとく館のリニューアル構想が動き始めた。工事スケジュールも決まった。2017年11月15日、龍馬暗殺150年の節目オープンを目指す。職員一丸となって、気合の新年のご挨拶である。 森 健志郎

龍馬生誕180年です。坂本龍馬記念館では既存館の改築、そして潮風、日光にも強い本館の新築で、楽しみ学ぶ博物館構想が動き出しました。ご期待ください。
龍馬生誕180年。心機一転スタートです！龍馬その人は無論、ご子孫にも素晴らしい方がいらっしやいます。今年も人生の出会いと妙味を発信していきます。
筒井 幹人
前田由紀枝



渡辺 亀尾 手島 三浦 中平 森 田中 尾崎 西本 筒井 佐々木 前田 中村 小島 濱田

新館の開館予定であり、龍馬暗殺150年でもある2017年11月まで3年を切った。この2年半が最も大事な時期になるので、緊湊一番取り組んでいきたい。
三浦 夏樹
リニューアル計画が動き始め、龍馬記念館は生まれ変わる節目にあります。充実した施設を

作るため、気を引き締めて頑張ります。

亀尾 美香

受付での接客はお客様への誠実な応対・気配りを心掛けます。現代龍馬学会の会員活動が円滑に進むよう、担当の事務局作業の効率化に努めます。
手島 ゆか

間もなく変化を迎える事となる記念館。準備の年になるであろう、この一年。心技体のバランスを整えて、臨機応変ゆとりを持てる土台作りを励みたい。
渡辺 曜子

龍馬記念館勤続11年目。企画展、イベント、コンサート等色々な仕事を経験させて頂きました。今一度初心にかえり心のこもった接客を大切にしたいです。
尾崎 由紀

自分が出来る事を確実に誠実に実行する。感謝・思いやり・優しさを忘れないよう常に努力していきたいです。
中村 昌代

今年はお正月にて、分かりやすい館内説明だけでなく、+αとして高知の魅力も合わせて来館者のみなさんにお伝えしていきたいと思っております。
西本 有里

2015年は未年。龍馬と同じで私も未年の年女です。龍馬のように目標に向かって前進できるような笑顔で頑張ります。
小島 千穂

龍馬の姉・千鶴が嫁いだ安田町からは勤王の志士が多く誕生しています。「安田まちなみ交流館・和」との連携交流をより深めていきたいと思っております。
佐々木 恵

4月より龍馬記念館に勤務して、龍馬について学ぶことができました。これからも龍馬の知識を広げお客様の質問にもお答えできるように勉強していきます。
田中 智子

ミュージアムショップをより充実させ、お年寄りから子供まで楽しめ、心に残るような商品選び、陳列の仕方、特に笑顔での対応！に心掛けたい。
中平 文

春に龍馬記念館へきて早くも年末がやってきました。来年はもっともっと龍馬記念館の縁の下の力持ちになるべく頑張ります。そして「龍馬『愛』」を育てていきたいと思っております。
濱田 愛華

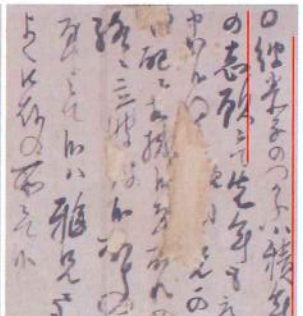
動画配信中 詳しくは8頁をご覧ください。

企画展「龍馬」を生きた「4代目坂本直道」展はじまる

反骨と高潔 現代に続く龍馬の系譜

坂本寿美子さん(93)に会ったのは一年前、積雪のある寒い日だった。都市郊外にある静かな病院は、周囲に雑木林もあって別荘地のようなたたずまいをしている。院長先生が「坂本さん、龍馬記念館からお客さまよ」と声をかけると、寿美子さんの目が一瞬輝いた。病人とは思えない力強さだ。私は何年来一番会いたかった「龍馬の玄孫」に会える喜びと、まさに今目の前にいる人がその人だという緊張感でいっぱいだった。

寿美子さんは開口一番「今の日本はひどいね」「龍馬の本を読むとスッキリするね。他の人ではスッキリしないわ」。口調ははつきりしているが、優しい目をしている。緊張は吹き飛んだ。病室から談話室に移って、寿美子さんお気に入りの缶コーヒーをいただきながら、両親やご自身の話を聞いた。



川原塚茂太郎宛龍馬書簡(文久3年8月19日)＝孫正義氏所蔵



寄贈された12代酒井田柿右衛門作「坂本龍馬立像」

権平は一人娘、春猪に婿養子を迎えたが跡取りにはならず、両家の跡は甥たちが継ぐことになったのである。龍馬家は、直の息子で独身だった直衛が大正6年(1917)に亡くなったあと、20年余り途絶える。そこで、昭和16年(1941)に龍馬家を復活させたのが、ヨーロッパ帰りの坂本直道(1892~1972)。直寛の長男である。



満鉄時代の直道＝44歳、大連であつて、巻をおかしめ

あつて、巻をおかしめ、迫力が読者の心をつつ。さすがは明治の先達坂本龍馬の血を受けているだけのことはある」と書いてある。その吉田から直道は政界入りを誘われたが、断わったという。寿美子さんは「父はすごい人でした。自分のことを考えなかった。人間としてカッコよかった」と言う。

私は寿美子さんの話を通して、今まで知りえなかった坂本直道が見えた気がした。そして、直道の向こうにいるのは、まさに「龍馬」に他ならないと思つた。

大戦前「パリに坂本在り」と言われた人物。帰国後、在野で日本の行く末を見続けた坂本直道をご紹介します。

今回、五代目坂本寿美子さんと六代目坂本陽子さんより、昭和8年(1933)に作られた第12代酒井田柿右衛門作「坂本龍馬立像」をご寄贈いただきました。長崎で撮った写真を基に昭憲皇太后大御夢にある白装束姿をイメージしたものです。宮内省と名家12家に贈った13体のうちのひとつ。大変貴重なものです。

それと合わせ、前述の川原塚茂太郎宛龍馬書簡も特別展示します。

前田 由紀枝

寿美子さんは、坂本龍馬家五代目である。四代目・坂本直道の一人娘だ。

坂本龍馬家は明治初期、維新に貢献した龍馬の跡目を継ぐよう朝廷の命があり、龍馬の甥・高松太郎が受け継いだ。直は龍馬の長姉・千鶴と安田(現・安芸郡安田町)の郷士・高松順蔵の長男。海援隊士で、叔父龍馬とともに激動の幕末をくぐった人。坂本直となる。

一方、男子がいなかった龍馬の兄・権平の跡は太郎の弟・習吉が継ぐ。後に自由民権運動で活躍し、キリスト教伝道に従事した坂本直寛である。坂本家は直寛を中心として北海道に渡っていった。

権平と龍馬の跡を継いだのは、ともに甥たち。郷土坂本家の長女・千鶴の子でもある。龍馬は脱藩の翌年文久3年(1863)2月、藩の仕事で上京中の兄・権平と京都で再会する。親子ほど年の離れた兄弟は、腹を割って話し合った。弟

を氣遣っていた兄は安堵して、「大いにご機嫌がよかった」ようである。しかし、龍馬は40歳になるまで家には帰らぬと言った。気持ちはおさまらない権平は、その後龍馬に跡を継ぐのかどうか意思確認を求めた。敵父のような兄に直接言えないのか、龍馬は兄嫁・千野の弟で広い視野を持った川原塚茂太郎に手紙を書き、思いのたけを伝えた。「どうか私を当てにせず、春猪に婿養子を迎えて跡取りにするよう勧めてください」と。(文久3年8月19日、川原塚茂太郎宛龍馬書簡)

龍馬生誕祭の一日

ヨッチョレ!よさこい・ドンドンと太鼓・締めは手筒に波の音

11月15日、夕暮れとともに桂浜がざわつき始めた。この日は、静岡県三ヶ日町から花火師を招いての「龍馬生誕祭 手筒花火大会」。今年4回目、あたりが暗くなる頃には、浜には見物人や、カメラマンなど1,000人が集まった。

生誕祭の先陣を切ったのは、地元桂浜よさこいチーム「桂浜・龍馬プロジェクトぜよ!」。噂の土佐の坂本は、日本を変える快男児・・・軽快なリズムに乗って25人の踊り子が浜で舞った。両袖に龍馬が、背中が海援隊旗が染め抜かれた派手な衣装が、海に映えた。加えて、波音が効果音の役割を果たし、観客から拍手がわいた。



ヨッチョレ!と「桂浜・龍馬プロジェクトぜよ!」チーム



迫力の手筒花火

続いて和太鼓奏者の水田耕二さんによる「和太鼓」演奏が「ドーン、ドーン」と、高ぶる気持ちをさらにおおる。いよいよ始まるぞ!と、危険防止のために、ロープで仕切られた波打ち際では、手筒花火の職人さんたちが準備に忙しい。ひととき高く太鼓が「ドーン」。それが



ジャンケンで手筒の抽選

また拍手であつた。さて、まだある。花火が終わって残された手筒、これが魔よけの筒」として人気があるのだ。しかし大小合わせて24本しかない。希望者によるじゃんけん勝負だ。大中小に分けてじゃんけんである。再び、浜に歓声が沸いた。



ドンドンと花をそえた太鼓

反省と未来への課題も提起
3回目の「レッツゴー・ハンド
インハンド」750人で、一本の鎖に

一夜明けて11月16日。夜明け前の朝6時職員、ボランティア、スタッフが桂浜龍馬像前に集合していた。レッツゴー・ハンドインハンド2014の本番である。事前の申し込みが450人と少なかった。もしつながらない時には、と心配がなかったと言えはうそになる。前日には、夜もろくに眠れなかった。ところが、当日はそんな心配は一挙に吹き飛んだ。手がかじかむ寒さの中を参加者の皆さんが続々姿を現すではないか。県内はもちろん北海道や九州からの参加もあり、幼稚園児から高齢者まで年齢も職業も関

係なし。

「龍馬サンが好きだから」「高知が好きだから」と750人が手をつないだ。確かに今年
は1,000人越えを目指そうと頑張っていた
だけに物足りなさも残ったが、やはり750
人が握手で結ばれ一本の線につながったと
きには、そんな気分を吹き飛ばした。見知ら
ぬ人と手をつなぎ、いっぺんで友達となつた
人からは笑顔が消えなかった。その750
人の中から抽選で10人の方に司馬遼太郎の
「龍馬がゆく」文庫本8巻セットのプレゼン
トも企画した。龍馬のごとく、この混迷の
時代を乗り切る人材が一人でも育ってほし
いという龍馬記念館の願いでもあった。これ
は結構好評で、来年もプレゼントにしようと
考えている。

濱田 愛華



少年龍馬。たちも並んだ

東吉野村に残る「銀の陣中箸」

天誅組 吉村虎太郎の遺品
奈良県東吉野村 阪本 基義

奈良県吉野郡東吉野村は吉野美林で有名な小さな山間の村。過疎と高齢化により人口は2,000人あまりである。天誅組総裁吉村虎太郎が東吉野村で戦死してから、今年で152年目を迎える。村では水本実村長の呼びかけで、平成24年25年の二ヶ年にわたって、講演会やウォーキングなど天誅組顕彰イベントが開催された。龍馬記念館の森館長にも遠路来村、講演をいただいた。学生時代を高知で過ごした私には、まさに「故郷に錦を飾る」思いであった。

家宝として保存

東吉野村は「天誅組終焉の地」といわれる。14人が戦死、1人が自刃、2人が捕縛された。しかし、村に残る天誅組の遺品は吉村虎太郎が故郷から持ってきた「銀の陣中箸」だけである。この箸は脱藩に際し母が虎太郎の身を案じて持たせたものである。今も所蔵家が家宝として大切に保存している。



文久3年(1863)9月24日、虎太郎は、中山忠光の本隊を追ってモッコのような粗末な駕籠に乗って東吉野村に入ってきた。先の8月26日、天誅組は千人もの十津川郷士の味方を得て高取城を攻撃したが失敗、これにもめげず、虎太郎は20数名の仲間と高取城に夜襲をかけ、味方の銃弾が下腹部に当たって負傷、以後ずっと駕籠で移動していた。

自由・平等への信念か

すでに虎太郎は破傷風にかかっていたという。それでも、駕籠担ぎの夫人に「辛抱せよ、辛抱せよ、辛抱をしたら新しい世が来る。それを楽しめ」と、いつて励ましたという。その気力たるや尋常ではない。坂本龍馬、中岡慎太郎に代表されるように、260年にわたる土佐藩の厳しい身分制度に対する

自由・平等への強い信念なのかも知れない。驚家口付近につれ、眼下に赤々と燃えさかるかがり火、「ド、ドーン」と闇をつんざく敵の銃声に驚いた夫人が逃げてしまった。虎太郎は、あとからきた土佐の森下儀之助、幾馬兄弟や数人の隊士に助けられて山をくだり、木津川の庄屋堂本孫兵衛宅に匿われた。しかし、彦根藩の探索が厳しく「銀の陣中箸」を形見に残して堂本宅を出た。

同行の隊士に支えられながら、さらに山を越えて逃れた。ついに、自らの限界を悟った虎太郎は、仲間の隊士を逃してただ一人農家の薪小屋に身を潜めた。翌朝、藤堂藩に訴えられ、自決を許されず「残念！」の一語を残して銃弾に散ったという。以来150年、天誅組の墓には花が手向けられて絶えることはない。敗者への哀れみなのだろうか。山人の優しさなのだろうか。現在社会で死語になろうとしている惻隱の情なのだろうか。だからこそ私たちは、幕末の動乱を駆け抜けようとした若者たちの高い志に、いつも惹かれてやまないのである。

歌で語れば

幕末の儒学者 岡本寧浦

往古より 儒学の教え伝えしは 僧侶にありて 寧浦もしかり



今久保 約雄

いつの時代でも学問を伝えたのは僧侶だった。土佐においては、天保から嘉永にかけて土佐の学界に、一種の学風を残した元僧侶で藩の儒学者、贈正五位、岡本寧浦先生がある。先生の学問の重きは、その師にある。当時「四斎」と謳われた林述斎、佐藤一斎、会沢正志斎、安積良斎、各先生方を師と仰ぎ、陽明学や詩文を磨いている。また、正志斎先生の「新論」に目を通せば、それが今、日本に必要な本物の教えと気づくはずである。

江戸藩邸学問御用係を最後に藩邸の役目を終え土佐に帰り、藩儒者をやめ、その後は寧浦塾「紅友社」に専心した。記録によると、毎日8時から正午まで教え、奇数日は勤、偶数日は各個人指導に読書回答、毎月2日は孟子、7日は易の筆記、休日は1・5・25と定められていた。その学風を慕っての入門者は多く、

1,000人は下らない。中には藩の重役、勤王党の志士もあり、役人、軍人、小説家など各分野で先生の思想的教化に触れた多くの人材を輩出している。土佐一級の塾であった。

嘉永元年、13代豊熙公が病没、知遇を得ていた寧浦先生はまるで後追うように5年後に亡くなっている。先生の眠っている場所には、生前の知人が多く眠っている。東の板垣山に退助が、すぐ東に徳永千規、北の山には田内衛吉(半平太の弟)が、西は片岡健吉、絵師金蔵、南には少年期を知っていたらしい以蔵があり、今としては見守っているような位置になっている。皆さん、昔話にふけっているかも。

漢文で彫られた墓碑

その岡本の墓域は緩やかな北斜面に整地され南向きに立っている。遠くから見ても普通の4倍もあり重量は推測



岡本寧浦の墓碑。追悼文が彫られている

12トン。当時の山には木馬道を作って引き上げたのだろうか。石工たちの苦労を想像する。

墓碑は正面に「寧浦先生墓」とあり、その文字は太く深い。柔らかい砂岩と



はいえ、石ノミで彫ったであろうその文字は大変美しい。左面から裏面そして右面へと、師である良斎先生の追悼文600有余字が漢文で彫られている。

私は常々、お墓はその人抄本としての一面があると思っている。良斎先生の追悼文の序文のみ訳し記す。

「嘉永六年十月四日土州寧浦君卒す年六十なり高智城の北真宗寺山にへんす是より先学者山崎氏の説を奉じて其の弊流固陋なり二十年来……り文書を作る才藻蔚然として傑出する者相望む蓋し以て君之が倡為なり不幸にして瀕逝し一藩感痛惜せり 弟子哭すること哀を極む皆謂う先生文学に功有ること偉なり苟も石を建て詞を銘せずば以て深き者宜しく安積子に如く莫るべしと是に於いて予に請いて之を銘せしむ……略 安政四年夏五月 幕府儒員 安積信述」

当代屈指の学者である良斎先生が、弟子の墓碑に600有余の追悼文を残すことに、寧浦先生の偉大さを認め得る。このような例は他にはない。当時の土佐における学問の高さ、人物の誇りを知ってほしい。偉大な歴史でも語り継ぐ大切さがある。昨年5月、落ち葉舞う樹木の中へ朋友を伴い墓参した。以前と違い見通しがよくて、墓地公園のようになっていた。一句。

風に舞う落ち葉踏みしめ先生の墓参に吾は何おか語らん

拜啓 龍馬 殿

69通

平成26年9月21日〜12月20日

お父さんが幕末の頃の歴史にとってもくわしいので、私も興味を持つようになりました。6年生になってから歴史を習うようになり、今は江戸時代について習っています。もうすぐ明治時代です。幕末です。今からとても楽しみにしています。今日ここにきて、坂本龍馬さんだけでなく、幕末に生きたいろんな人のことを知りました。今後も歴史に興味を持って学んでいきたいと思っています。そして今の日本を作ってきた人々に感謝の気持ちでいっぱいです。
 (9月29日 兵庫 K・U 11歳 女子)

札幌から25年振りに桂浜へ来ました。当時は宮崎に住んでおり、飛行機で高知空港よりこちらに寄りました。町並みは大きく変わりましたが、この海からの景色は当時のままです。娘も二人生まれ成人していますが、二人共、海にちなんだ名前をつけました。たぶん三度目はないと思いますが、太平洋のかなたから坂本龍馬様を慕います。
 (9月28日 北海道 T・O 57歳 男性)

名前だけは知っていたけれど、この年齢になるまで詳細は知りませんでした。昨日も職場で落ち込むことあり…。夫と二人ひととついで来た土佐の地は自分をおだやかにしてくれま

こは私達、龍馬さんの魂を感じる者達の「パワースポット」です。生きていく途中に何度も何度も倒れそうになります。いつも貴方のパワーで立ち上げられる。常に前へ！前へ！またすぐにもって来るき！
 (11月16日 岡山 R・F 56歳 男性)

私は今月初めて「こりよ うまきねんかん」にきました。一番おもしろかったのはめいしを作ったことです。自分の名前とあはつじいじの名前を作りま

た。そして龍馬殿の生き様、考えにふれ、職場に戻ったらまた自分らしくがんばってみようというパワーができました。先を見ずえつて押し進んで毎日丁寧に積み重ねていきます。今日から私のこともちよこびり気にかけてくださいます。
 (10月10日 東京 S・S 57歳 女性)

龍馬の生まれた町の小学校に通っている6年生。龍馬さんのことについて学びに来ました。龍馬さんは「新しい日本」をつくるために努力して、仕上げができたこととは残念だけど、すごいなと思いました。龍馬さんは今の日本を見てどう思いますか。戦争をしようと言っている人がいることをどう思いますか。ぼくは戦争をせず、平和なままの日本であってほしいと思います。ぼくはたとえ龍馬さんのように強くたくましく全力で立ち向かいたいと思います。
 (10月17日 高知 H・K 11歳 男子)

龍馬さんと同じ高知に生まれ育ったことをうれしく思った誇りに思います。私も何か一つ人生で成し遂げたいと思っています。
 (10月26日 高知 A・N 44歳 女性)

初見参で訪問いたしました。小生、還暦経過六年です。未だに功なきを愧ずす。多分これからはマイペースで生きていくと思えます。司馬さんは一人は何事かを為すのが人生と言いますが、私にはレベルが高すぎます。司馬さんを通して龍馬さんを知ったことは、私の人生を豊かにしていただきました。いつかはそちらで会いたいです。
 (11月19日 奈良 K・N 66歳 男性)

子どものころより幾度となく訪れていた桂浜。あなたの銅像を見上げて、自分の小ささを恥じていた若年者も気付けば40手前とあなたの年を越えていました。ですが相変わらず小さき男は初めてあなたの記念館を訪れ、改めてあなたの器量と偉大さと、あなたを偲んで訪れる人の多さを目の当たりにし、胸の奥が熱くなるばかりです。人生折り返し、今からでも遅くない。あなたのようにあなたに少しでも近づけるように、龍馬さんのような自然体でいこうと思えます。かしこ。
 (11月20日 高知 A・S 39歳 男性)

こんにちは。何度目の来館か忘れましたが、ぼかぼか陽気に誘われて逢いに来ましたが今回はバイクです。桂浜に立つあなたを見る度にヤル気が出て元気をもらえます。何かを始める時は必ずこへ来てください。まだ

今年も来ましたよ、あなたに会いに。毎年は年末に来るのですが、今年の年末は忙しく「ならば連休に！」ということとで、この三連休を利用して奈良からやってきました。やはり年に一回はあなたに会わないと、あなたと話をしないと、元気がでけません。私は今、教師をしております。あなたのように瞳の輝いた、でっかい、志のある子どもをたくさん育てて、これからの日本にこれからの社会に貢献していこうと思っております。これからも見守ってください！龍馬さん!!
 (11月2日 奈良 N・I 51歳 男性)

私は自分をつらぬくのがヘタです。まわりの人に流されてしまふ。意志を相手に伝えるのもヘタです。悪く勘違いされてしまふことがしばしばです。龍馬さんのように自分の意志に自信が持てたらいいなって思っています。キボウやユメを実現できたら素敵だと思えます。今日ここにきて、自分の思いを一つでも実現させられる実行力を持てたらなって思っています。頑張ります。(11月1日 無記名)

もしこの時代にいってもきっと大物になった人物だと思います。人としてのミリオクたつぶりで、この時代では考えられない物の見方の軽さや柔らかさはすごいと思う。会ってみたいかったです。
 (11月5日 兵庫 Y・S 26歳 女性)

お誕生日おめでとう！今日ここにいられて感謝しています。
 (11月23日 愛媛 T・T 45歳 女性)

今、私は京都に住んでいます。龍馬さんの生まれた高知に生まれ、京都で生きる。なんか不思議な気持ちです。高知の海はやっぱりいいですね。また帰って来ます。
 (11月23日 京都 S 24歳 女性)

龍馬サマの事はごく最近に興味を持ちました。幕末の大変な時に龍馬さんのような行動的な人物がいた事、まわりの皆を元気にする行動、私もいろんな事に悩んだりしましたが、龍馬さんの事を考えると悩みもちっぽけに思えます。そして桂浜から見た景色、家に帰るのが嫌になります。足があまり良くない私ですが、リハビリを頑張って、また龍馬さんに会いに来ます。
 (11月24日 兵庫 C・U 51歳 女性)

編集者より
 龍馬の誕生月前後の10〜12月は行楽シーズン、学校の遠足シーズンでも多くのお客様で賑わいました。「龍馬は辰年ですか？午年ですか？」というご質問をよく受けますが、龍馬は未年。2015年、龍馬は年男です。そして生誕180年ということで、今年も各地でお祝いの行事が盛大に催されることでしょう。照れながらも嬉しそうに笑う龍馬の姿が想像されます。
 尾崎 由紀

ここは館長の部屋 森 健志郎



わずか二分間のために

先の11月、龍馬生誕祭の15日は桂浜で手筒花火を打ち上げ、翌日16日(日)早朝には、龍馬記念館前のシェイクハンド龍馬像から、桂浜の龍馬像まで540メートルを握手でつなぐ「レッツゴー！ハンドインハンド」イベントを企画した。ともに快晴に恵まれ、花火には1,000人近い観客が、また、ハンドインハンドは750人が握手の鎖でつながった。さすが龍馬さん。大成功であった。
 この750人という数字を改めて考える。実は今回、龍馬の誕生日・11月15日ということもあって1,115人の鎖を目標にした。1,000人を超える鎖への初チャレンジの意味もあった。それからいうと750人という数字には悔いが残る。現実には「あれだけPRもしたのに」と担当職員の一入は唇をかんでいた。
 私も悔しくなかったと言えよう。ただ、その悔しさは一瞬で消えた。同時に現実の「750人」の重みがぐんと胸に響いてきた。やっぱりすごい。のである。イベント時間として見れば、握手の鎖が540メートルの一本の線であるのはわずかに二分に過ぎない。いわば、二分に賭ける勝負。とでもいうべきか。そのたった二分間のために750人が地元はもちろんな北海道、九州からやって来るのだ。
 北海道から参加のAさんなど「昨日の夕方高知に入りました。握手もできたので、午後の便で帰ります。桂浜いいですねえ」と屈託ない。「瞬間、電気が走った、いや間違いないですね」と瞬間の感動を笑顔で語ってくれたのは愛媛県からの若い女性のグループであった。
 8時半、合図で一斉に隣の人の手を握る。スタートの桂浜龍馬像は坂本家9代目、坂本登さん。そして龍馬記念館前のゴール、シェイクハンド龍馬さんの手を握るのは県文化生活部の岡崎順子部長さんである。
 「さあ二分間です。現代心の八策を龍馬さんに誓いましょう。ひとつ。家族を大切にしよう。……」「いつかつ、正々堂々と歩もう。」「あたりまで来たときには、こみ上げるものがメカネのレンズを曇らせていた。老若男女関係なし。750人が龍馬さんで一つになった。

越行の記 林市郎右衛門を追う



新発見の手紙の裏書きについて、京都龍馬会の赤尾理事長が調査してくださり、裏書きに書かれていた林市郎右衛門は、龍馬と深い繋がりがあることが分かっています。詳細は追ってお知らせしますが、まずは発見の経緯についてご報告いただきました。
 三浦 夏樹

9月中旬、今春話題になった坂本龍馬直筆「越行の記」の冒頭部分裏側に書かれた文字も龍馬が書いた可能性が高いことが確認されました。
 「河原町四條上ル／米や町菊や安兵衛、「遠(近)江國塩津宿／林市郎右衛門」などが読み取れます。米屋町菊屋はあの峰吉の家ですから龍馬が記したとしても不思議はありません。「林市郎右衛門」とは何者なのか、初めて聞く名前です。
 9月29日 福井県立歴史博物館に展示されている龍馬の手紙「越行の記」を見に行くことになりました。途中「近江塩津」にも寄らなくてはなりません。琵琶湖の北端に位置する入江で日本海側と琵琶湖をつなぐ交通の要衝でした。塩津の西「大浦」に「北淡海・丸子船の館」があることを龍馬研究家MM女史から聞いていたので訪ねることにしました。事前に歴史に詳しい方を紹介してほしいと伝えておいたところ、地元観光協会の大田氏にお越し頂きました。いきさつを説明し「林市郎右衛門」を探しているところをそばで話を聞かれていた受付の女性が「それ、うちの先祖です！」と一声。鳥肌一名札を見ると「林」さん。お墓には「林市郎」と書かれたものがあるという。おうちが塩津で代々宿屋をしていたとの事。いきなりなんというところか。その後大発見！歴史研究家あさくらゆう氏が新たな資料を発掘。「林市郎」の驚くべき履歴がわかってきました。なぜ今まで誰も気づかなかったのか、「林市郎」ただの宿屋ではありせん。特定非営利活動法人 京都龍馬会 理事長 赤尾 博章



宿屋を営んでいた林家の様子。屋号は「丸一」。

■はじめまして、りょうまさん!「シェイクハンド龍馬像と握手!!写真」展

記念館へ入館される前に、入口で皆さんを出迎えてくれるのが“シェイクハンド龍馬像”。皆さんご存知でしょうか?

記念館開館20周年を記念して建造された“シェイクハンド龍馬像”は、大きな手を差し伸べていつでも誰とでも分け隔てなく握手出来るように立って居ます。

新春1月・2月は、はじめまして、りょうまさん!「シェイクハンド龍馬像と握手!!写真」展を開催しています。今年で5年目を迎えるその右手とは、色々な方々が握手をして下さいました。そしてほとんどの人達が写真も撮って行かれます。にっこり握手する人や龍馬像に抱きつく人などポーズは思い思い。記念館もそのポーズを切り撮らせて頂きました。



龍馬のスタイルで撮影をしているのはカルチャーサポーターの横路さん

シェイクハンド龍馬像と握手!!思いのポーズをとる人たち!

入館者の人たち



いちむじん

“シェイクハンド龍馬像”の生みの親、大野良一さん・西本忠男さん・吉岡郷継さん3人の彫刻家がめざした龍馬像は「誰もが共通して龍馬の温かみを感じる手」だったそうです。そして「悩んでいる人や勇気づけられたい人が、この像を見て握手をし、世界に羽ばたく次の龍馬さんに出てもらいたい。」という思いも込められているそうです。

龍馬像の建造の過程では、香美市楠目小学校の生徒さんが、まだブロンズに成る前の白い石膏像と初対面初握手。除幕式では坂本登さんや小林綾子さんが微笑んで握手。ジョン・ルース前駐日大使はご家族と一緒に。NHK「龍馬伝」の演出家大友啓史さんや後藤象二郎役素顔の青木崇高さん。元気いっぱい朝倉小学校の6年生は自分の顔と握手。幕末の志士ゆかりの方なども。

暑い日は龍馬像にジュースを持たせる少年。雨の日は傘を差して握手するご婦人。様々なシーンのどんなポーズでも皆さんの表情は生き生きと嬉しそうに写っています。

2014サッカーワールドカップでは、“シェイクハンド龍馬像”自ら10番のユニフォームを着てサムライブルーで出迎えていました。

さあ、皆さんも是非“シェイクハンド龍馬像と握手”!!そして思いのワンカットを撮ってみて下さい。
中村 昌代

■スマホをかざせば誌面が動く!



左の「動画配信中!」のアイコンがついている写真全体に、スマホをかざすと動画が再生されます。

無料アプリ「COCOAR2」をダウンロードして動画を見よう!



左のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロードし、「動画配信中!」のアイコンがついている写真にかざして「動く誌面」を体感しよう!

※「COCOAR」ではなく、必ず「COCOAR2」をダウンロードしてください。
※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合があります。
また正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2015年3月31日まで閲覧可能です。

入館状況

2014年12月20日現在(開館以来8,393日)

- ◆総入館者数 3,625,345人
- ◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
- ◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
- ◆2014年度最多入館(2014年5月4日) 2,668人
- ◆2014年度最少入館(2014年12月17日) 67人

編集後記

新しい年を迎えました。新しいもの好きで様々なことにチャレンジした龍馬にならって、今号から「AR動画」を導入。専用のアプリをインストールして指定の写真にかざすと動画を見る事ができます。今号では1頁の職員集合写真にかざすと館長から新年のご挨拶、2頁の龍馬像の写真にかざすと、龍馬像の全体が詳しくご覧いただけます。今後もARを使って、企画展の目玉資料やイベントの様子などを紹介していきます。龍馬記念館を“体感”できる紙面にご期待ください。(雪)

館だより“飛騰”第92号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

〒781-0262 高知市浦戸城山830
発行日 2015(平成27)年1月1日 TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015
発行 公益財団法人高知県文化財団 http://www.ryoma-kinenkan.jp
高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円・高校生以下無料

身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・
戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

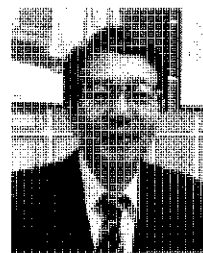
館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、92円切手5枚をお送りください

私のテーマ

永国先生に託されて (上)

ジョン万に英語を習ったある姫君の秘められた生涯

小島 博明



はじめに
—土佐人の血、誇らし〜

ジョン万次郎研究家の第一人者だった永国淳哉先生の没後1年の追悼会が昨年10月11日生前永国先生が研究室代わりに使っていた高知市浦戸にある喫茶店「鯨人カフェ」で開かれた。会には永国さんと親交があり、また、現在長編ジョン・マンを執筆中の作家山本力さんも出席、熱く故人を語った。そして会場にはもう一人のジョン万研究者、北代淳二さん、ハワイプナホスクールのひろみ・ピーターソン先生ら120人が参加した。

山本力さんは「永国先生は、ご自分が苦勞して集められた貴重な資料を、実に惜しげもなく見せてくれました。男は密かに見栄を張って生きるもの。土佐の男の格好よさを感じました。小説は、山本力の名で出るがその裏にはたくさんの人々の支えがある。感謝の気持ちを忘れず、書き続けたい」と結んだ。誰もが納得でうなずき合ったものである。本題に入ろう。永国先生が亡くなられる数カ月前のことである。も



故永国先生を熱く語る山本力さん

とは永国先生のごとくに持ち込まれた話である。持ってきたのはご老人。土佐山内家筆頭家老佐川深尾家の姫として生まれた深尾屋門（やもん）の家筋と名乗り、数点の資料も持ってきてくれた。それ以上にここに来るきっかけを聞いて興味が深まったという。「先祖の事話を語るはこれまで先祖の恥をさらすことで口外無用とされてきました。でも、子孫の私としては恥ずべきことではなく、逆に誇るべきことと考えました。先祖の供養のためにもぜひ世に出してほしい」。

この話には私は感動を覚えた。そこで、私なりの考察、解釈を加えながら、まとめてみることにした。

セーラーの悲話 英語を習ったばかり

生まれは天保9年（1838）6月。土佐山内家筆頭家老佐川深尾家（万石）の姫である。その時代、土佐藩は海防のため、西洋砲術を導入していた。深尾家でも日々訓練に励んでいた。成長した屋門姫は、西洋砲術を中心とする西洋学に興味を持っていてオランダ語を理解し周囲を驚かせたという。

そんな折、ジョン万次郎がアメリカから土佐に帰ってきた（1852年）。万次郎は英語を話し、日本語をほとんど忘れていた。その万次郎に、日本語を改めて教え、万次郎からは英語を学ぶというスタッフの一人に屋門姫が加わっていた。当時、視野の広い吉田東洋、また少年後藤象二郎がいた、ジョン万から事情を聞いた画家の河田小龍は「深尾屋門」を作成している。屋門姫

は彼らとの接触を通じてアメリカに惹かれていった。ただ、そんな屋門姫を時代の波は翻弄するのだ。

激動の幕末がいよいよ幕を開ける。ペリー提督率いる黒船の来航（1853年）である。産業革命によって、西ヨーロッパ各国はアジアへの市場拡大を視野に捕える。一歩出遅れたアメリカにとつて太平洋航路の確立が至上命題となった。当時は鯨油全盛の時代である。アメリカは太平洋日本近海に700隻もの捕鯨船を出動、操業していた。そうした大量船団の塩、水、食料の補給には、日本の開国は不可欠となつていった。

日本開国作戦をペリーは考えた。先に中国に対して行ったように日本人に恐怖で圧力をかけよう。友好を訴えるより利点があると。近代国家の軍事力を見せつけるのが持論であった。一方、幕府はペリーの強硬な姿勢に、品川等の主要港に台場と呼ばれる要塞を構築し、オランダには大量に剣付きゲベル銃を発送するなど事態は切迫してきた。

アメリカの事情に詳しいジョン万次郎は急ぎ上江戸に呼ばれた。そんな揺れる日本の空気が屋門姫の人生にまで及ぶのである。幕府は開国の条件を少しでも有利にしようとする手この手を考えた。そんな「作戦」の一端が屋門姫に。なんと、屋門姫をペリーの元に送ることにしたのである。幕府はこの作戦に、数人の賢い美女を選びだした。さらにその中から、ペリーと英語でコミュニケーション



会場からあふれて話を聞く参加者

ジョンが取れる人物として屋門姫に白羽の矢を立てた。「お国のために」と屋門姫は口説かれた。まさに人身御供。決死の覚悟だったに違いない。ジョン万に英語を習ったばかりに……。

それはかりではない。屋門姫には更なる訓練が待っていた。以後、深尾の姓を名乗ることも、土佐に帰ることも許されなかった。つまり、「深尾屋門」は、現世から抹殺されてしまったのである。「深尾」が名門であるがため、名を惜しんでの処置だったろう。

伊豆下田ではハリスとお吉の悲話が伝わる。ペリーと屋門姫の話はその前にさかのぼる悲話があったということになる。

さて、永国淳哉さんの話はこれからである。

話題人 インタビュー

高知県文化生活部長 岡崎 順子さん

今、ここで「ベストを尽くす」が信条

龍馬は“日本の宝”



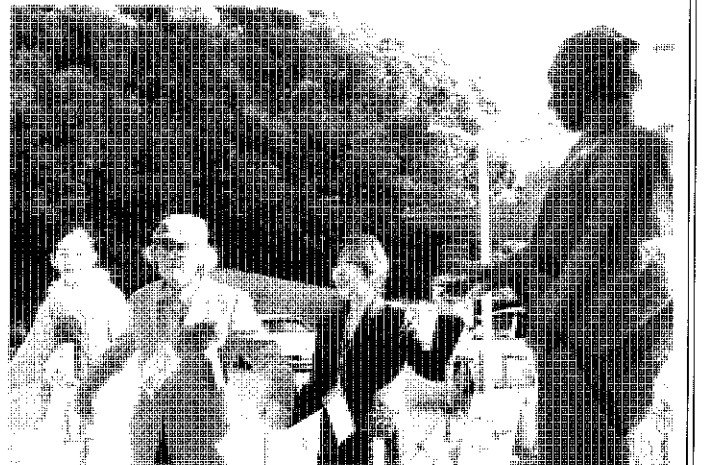
昨年11月16日。桂浜は上天気。数日前の寒波は和らぎ、暖かな朝となった。この日、スタッフは6時集合。気合は十分だ。第3回「レッツゴー！ハンドインハンド」開催である。

空が明るんだ頃、ラスト地点・記念館前のシェイクハンド龍馬像の隣では、県文化生活部長・岡崎順子さんが並んだ。桂浜のスタート地点はいつも通り、郷土9代目坂本登さんである。岡崎部長はシェイクハンド龍馬像と手をつなぐ重要な役。お願いしたとき「私でえいが？」と何度も聞き返されたが、龍馬と手をつなぐ初めての女性である。「ぜひお願いします」「分かりました」ということで、このときを迎えた。

本番前のリハーサル。「みなさん、思い切り手を伸ばしてください」というアナウンスが流れた。いよいよ、そのとき。全員の手が繋がった。伸ばした手の間隔はいつの間にか狭くなっていった。参加者は昨年を上回る750人だった。

閉会あいさつで、岡崎部長は「記念館はこんなに大勢の方たちに支えられている。もっともっと愛される館にします」と締めくくった。心なしか、その顔は上気して見えた。

新年がスタートした。新しい県立坂本龍馬記念館建設に取り組む高知県リーダーである県文化生活部長・岡崎順子部長に聞いた。



感動しました。

「よかったです。その感動こそがこの企画のねらいです。握手の鎖とこのような企画はいいがですか。」

「そうですね。今は多くの善意でできていると思うけれど、継続のためには新しいステップが必要でしょうね。」

握手して終わり、というのではない新しさ。参加者の満足度を高める工夫ですね。具体的にすぐ浮かばないけれど……。それにしてもこういう企画を生み出した森健志郎館長は熱い。言い出したらきかんろううけど、その「一刻者（いつこもん）」気質があつた情熱、つまり実行力を生み出すんだと思いますよ。職員は大変かもしれないけど（笑）。でも、その「現場の思い」というものが重要で、このたびの新館建設実現にもつながっています。

念願の新館オープンへ

「ありがとうございます。そんなに言っていたら、うれしいです。記念館は館長以下、工夫や努力を重ねて今日に至っていますから。早速ですが、高知県にとって「坂本龍馬記念館」というのはどういった存在なのでしょう。」

「もちろん観光、文化における大事な施設です。ただ、今まではどちらかと言えば観光的な色合」



「私たちの思いや願いと重なっていますよ。」

「ありがとうございます。」

「きょうはお忙しい中、ありがとうございます。今年は龍馬誕生日の11月15日が日曜日。レッツゴー！ハンドインハンドの開催日です。ぜひまたご参加ください。」

「岡崎部長は、県庁職員の中で一人の知事部局女性部長。「できないことはできない」と言い、やると決めたらきつちりやる」という人物評。気負いは感じさせないが、小柄な体の中に熱いマグマが流れている。県庁部長室での話の途中、県議会議員や職員の声掛けが続き、多忙さが垣間見える。それでも気持ちのよい時間は、予定を超えています。」

岡崎 順子（おさき じゅんこ） profile

高知県文化生活部長。1956年高知県黒潮町生まれ。学芸中学・高校から大阪大学法学部卒業。1980年に高知県事務員（輪多事務所主事）として入庁。教育委員会事務局、企画部長、企画振興部企画調整課長、制作企画部部長、産業振興推進部部長、文化生活部副部長、教育次長などを経て、2年前から現職。休日にはマラソン、自転車、水泳、山登りなどでリフレッシュしている。



前田 由紀枝（まえだ ゆきえ）
現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬記念館学芸主任

「私の方ではないですよ（笑）。私の思いは「文化」を観光に生かし、県政全般のパワーアップをしたいということ。」

「龍馬の生まれた故郷である高知は、他県とどんな差別化ができるのか。やっとな具体的なビジョンが見えてきました。今まで要望の多かった「本物」の龍馬資料もほとんど紹介したいですね。」

「どこでも何でもがんばる精神」

「岡崎部長の話は明快ですね。こちらまで気持ちが大きくなります。どんな「志」を持って県庁に入ったのか、お聞きしたくなりました。」

「大きな志はありませんよ（笑）。私は「どこでも、何でもがんばります」。つまり、「今いるところでベストを尽くす」ということが信条です。」

「文化生活部というのは、龍馬記念館など文化施設を所轄する文化」

「推進課から、防災、ITまで多種多様ですから、まさにその信条でやっています。」

「就任まもなくの尾崎正直知事が「県の産業振興を図る」という号令をかけ、私もそのことに関わりました。産業振興には、一つのことを何通りにも生かすことで、産業全体を盛り上げる考え方が必要です。一つのものだけを終わらせない。例えば、今言ったように、文化施設を観光や産業まで広げて活用することですね。」

「なるほど。一つのことを多面的に活用し発信することは龍馬記念館にも通じるものがありますね。龍馬と高知県の将来について伺います。」

「そうですね。柔軟な発想が必要ですね。」

「高知県は人口が少ない。産業もない。しかし、人材は育てられる。「人は宝」です。次代の高知を担う力のある若者を育てたいですね。龍馬の新しいことにチャレンジしていく心、世界を見据えた視点。県外に出ていかなくても高知でがんばろう！という人材育成です。そのことが県政全体をパワーアップしてくれるはずですね。」

「また、文化とは心の豊かさであり、県民の暮らし、つまり歴史です。生業の歴史は県民の精神的な基盤になります。そして文化の基礎なんじゃないかな。一人一人の歴史が心、そして県の豊かさにつながりますからね。」



「歴史の本質」

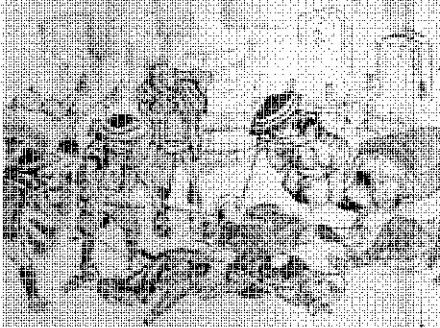
宮川 禎一

坂本龍馬の細部を研究しながら思うのは「これは歴史の研究なのだろうか？」ということだ。日本近世史の大学教授が卒論指導に際して学生から「沖田総司で書きたいです」と相談された気分を想像されたい。では沖田総司はダメで坂本龍馬なら良いのだろうか？龍馬を歴史的手法で研究しているが、それは正統な幕末・維新史ではないのではないかと思う。

ふた昔以上も前に流行したマルクス主義的歴史観では歴史は経済により裏付けられたものであり、人間の役割は低評価である。人間の営みは歴史の発展段階により規定されていて、資本主義が行き詰まると社会主義に至るのが必然であるらしい(懐かしい)。そのような歴史観に立てば龍馬研究のような個人史が歴史の本質であるわけもなく、龍馬同盟は龍馬がいようがいまいが歴史の必然であって、ほつておいても出来たのだとの考えだ。人は歴史にただ動かされていくだけなのか(龍馬を低評価)、人は歴史を動かすことができるのか(龍馬を高評価)という命題

に至るのだ。どちらが正しいかはなく、どちらであって欲しいかという問題だ。歴史をずっと遠くから眺めればどんな英雄もアリの一匹のようなものだ。そのような無情な視点に立てば個人史を研究する意味も分からなくなる。ただし日本史の初めは「平家物語」のような歴史物語から発しており、確固とした歴史観に貫かれたものではなかった。判官最良の「義経記」はどうか。その延長上が「竜馬がゆく」ではないだろうか。歴史の中の人間がテーマである。そもそも人間を抜きにして歴史があるわけもなからう。

龍馬個人を研究しながらも歴史の本質とは何なのかを考えない訳にはいかない。



150年前、元治元年七月の禁門の変で敗死した長州兵の遺体を鳥辺野に処理する様子を描いた図。『近世珍話』(京都国立博物館蔵)より

コラム・龍馬のこと

「小・中学生のための坂本龍馬物語」

現代龍馬学会員 教員 OB 宮 英司

この本は、平成13年3月1日に高知市教育委員会から発行された。今は亡き松尾徹人市長さんの「龍馬都市宣言」に基づいた取り組みであった。当時は小学校の5～6年生に公費配布され、以後数年間は授業における活用法が研究されたことであった。その後、財政難で公費配布はなくなったが、「龍馬伝」以降、その復活を願う声は根強いと聞く。

高知市の副読本だから、間違いを指摘されないようにと気を配った。事前に龍馬研究家のみなさんにお目通しいただいたが、非常に好意的なものが多かった。表紙をどうするかも悩んだ。末永く家庭に保存してもらいたいとの願いを込めて、驚きのハードカバーにもらった。他の多くの副読本が学習後に消えていくが、この本だけは家庭の本棚に凜と座ってほしいとの思いである。これは坂本家末裔の土居晴夫さんにいちばん喜んでいただいた。

完成した本を手にして喜んだのもホンの束の間。市長秘書の方から電話が入り、桂浜の龍馬像の写真が裏焼きになっているとのこと。真っ青になったのを覚えている。活字は何度も見返したけれど、写真の裏焼きまでは気づかなかった……。しかし、さすがはプロの業者さん。完璧に写真を張り替えて、全く気がつかない出来栄となった。

ひとつ嬉しいのは、当時は「自由民権記念館」だけで市販されていたのが、今は「坂本龍馬記念館」、「龍馬の生まれたまち記念館」、「高知観光情報発信館・とさてらす」の4か所で販売されていること。高知で暮らす人々には、家庭に常備の図書としてぜひ手元に置いていただきたいものである。(定価 900円)

ところで、この図書が並べられている傍に鎮座している薄緑色のポップは私の作品です。今度ぜひ見てみてください。

“話してみるかよ”

「桂浜銅像物語」

現代龍馬学会 井倉 俊一郎

桂浜坂本先生銅像物語 Ryouma Mokuma Yosiyasu の土佐人気質

坂本龍馬 1835年生まれ 野村茂久馬 1869年生まれ 入交好保 1903年生まれ 龍馬と茂久馬 茂久馬と好保 共に年の差 34歳。晩年の田中伯爵と野村茂久馬翁の多大なる援助で入交好保他青年團念願の坂本龍馬銅像が1928年(昭和3年)5月桂浜に建設された。

「桂浜の巖頭に砕くる太平洋の荒浪が不断のみ(鑿)を揮って彫りあげたものに、長曾我部があり、維新の志士があり、岩崎があり、浜口がある。中略 第二の坂本でよ。第三の坂本でよ。云々」(坂本先生銅像建設趣意書の一文、この英断が高知市桂浜が100年以上続く龍馬詣での聖地となった。)

第二の龍馬である野村茂久馬翁は「どうぜよ、銅像はできるかよ」と名刺に捺印して、第三の龍馬入交好保に自動車フリーパス券を提供する。そして坂本先生銅像建設會會長を引き受ける。これにより好保は後ろ盾を得、田中光顕伯爵と面談し秩父宮より御下賜金を頂くことができた。

土佐の交通王野村茂久馬翁が企画した最大のイベントは商工會議所会頭時代の昭和12年「土讃線開通記念南国土佐大博覧会」の開催である。つまり南国土佐大博覧会プロモーションフィルムの制作であった。昭和50年代に放映されたNHK「昭和の回顧録南国土佐大博覧会」によるとこのイベントの予算は高知市の年間予算の約三分の一、南はミクロネシアから北は樺太からパピリオンが出ており、奉加帳には山内侯爵、岩崎男爵より各一億円ほどの寄付金があった。現存するフィルムを見ても当時の高知県観光の勢いが感じられる。

第三の龍馬である入交好保氏の最大の業績はもちろん坂本龍馬像を桂浜の現在地に建設したこと、そして手結山観光ホテル、土佐カントリー倶楽部、高知龍馬空港拡張ジェット化実現に貢献なさったことである。

龍馬 Ryouma, 茂久馬 Mokuma 好保 Yosiyasu.RMY 三者の土佐人気質(ユーマ、やると決めたらやる、思いやり、進取の気性)を今平成時代に生きる我々が顕彰すべきではないでしょうか。第四、第五の龍馬を高知から輩出するためにも

(2015年3月13日午後6時30分より得月楼にて「土佐の交通王野村茂久馬翁の足跡を学ぶ」を開催します。)